

日本学術会議 国際対応分科会 自己点検報告書

国際対応分科会(小委員会)名 IASC小委員会

更新日 2011/12/8

(2009/05/01の形式)

国際学術団体に関する事項

国際学術団体名

(和文) 国際北極科学委員会

(欧文) International Arctic Science Committee

(略称) IASC

日本学術会議加入年(西暦) 1991 年

運営組織の名称・役員の構成等

運営組織の名称(欧文) 国際北極科学委員会評議会 IASC Council

	会長	会長代理/次期会長	副会長	事務局長
(氏名)	David Hik		Jacqueline Greb-meier Byong-Kwon Park Naja Mikkelsen Susan Barr	Volker Rachold
(国)	カナダ		米国、韓国、デンマーク、ノルウェー	ドイツ

役員選出方法の概要(120文字程度で記載)

各国1票の投票権があり、会長、副会長を選出する。

加入国・地域の数 19ヶ国

主要加入国(10ヶ国程度を列挙)

ノルウエー、ロシア、米国、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、アイスランド、カナダ、ドイツ、日本

国際学術団体のホームページURL

<http://iasc.arcticportal.org/>

国際学術団体の年間運営経費

386,200€ (約42,480,000円)

日本の分担予定額[事務局で記入]

1,456千円(2012年度)

国際学術団体の活動状況

総会・学術研究集会の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催地	参加者数	日本からの参加者数	学術会議共催/協賛の有無
2011	北極科学サミット週間 (ASSW)シンポジウム	ソウル(韓国)	250	28	無
2009	北極科学サミット週間 (ASSW)シンポジウム	ベルゲン(ノルウェー)	322	13	無
2008	SCAR/IASC/IPY オープン科学会議	サンクトペテルスブルグ(ロシア)	3000	100	無
2008	国際北極研究シンポジウム(ISAR-I)	日本科学未来館	188	121	有

運営に関する会議の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催場所 (機関等)	参加国数	日本からの代表者名	学術会議の代表派遣
2011	国際北極科学委員会 (IASC Council)	ソウル(韓国)	19	1	0
2010	国際北極科学委員会 (IASC Council)	グリーンランド、ヌーク (デンマーク)	19	1	1
2009	国際北極科学委員会 (IASC Council)	ベルゲン(ノルウェー)	19	1	0
2008	国際北極科学委員会 (IASC Council)	システフカル(ロシア)	18	1	1
2007	国際北極科学委員会 (IASC Council)	ハノーバー(米国)	18	1	1

出版物等(主要な定期刊行物・不定期刊行物を刊行頻度とともに箇条書きで記載)

IASC Bulletin 年1回
 Arctic Research for ICARP-II 不定期
 Observing the Arctic for SAON 不定期
 Progress IASC 年1回

活動状況(各項目につき過去5年間の状況を120文字以内で記載)

<p style="text-align: center;">国際機関等の提唱で行った活動</p> <p>2011年1月12日～14日、ポツダム会議場で第1回IASC-作業部会のワークショップが開催された。IASCでは5つの作業部会(大気、海洋、陸域、雪氷、社会と人間)の設置を検討してきた。各分野の日本代表として、6名が参加した。今後、WGを中心に、国際的な連携が広がる。</p>
<p style="text-align: center;">国際機関等への提言等</p> <p>2010年12月7日～9日、第2回国際北極研究シンポジウム(ISAR-2)がIASC小委員会主催のもとで、東京、一橋記念講堂で開催された。参加者は15か国228名であった。2010年3月1日、IPY2007-2008シンポジウムが学術会議で開催され、日本の北極観測体制強化について提言があった。</p>
<p style="text-align: center;">国際事業等への参加・実施等</p> <p>2011年3月29日～31日、韓国ソウル、COEXで北極科学サミット週間(ASSW)中に、国際北極シンポジウムが開催された。日本から28名、全体で約250人が参加して、北極研究の活発な議論があった。基調講演として、東京海洋大学の島田浩二氏等の興味深い発表があった。</p>
<p style="text-align: center;">全世界的/地域的研究課題への取組み</p> <p>IASCは北極環境変化を長期的に監視する持続可能な北極観測網(SAON)を強化し、北極域住民、民族の支援、協力について全世界的、地域的に取り組んでいる。2010年10月、スバルバル観測システム(SIOS)のキックオフ会議がオスロで開催され、日本はこのプロジェクトに参加した。</p>
<p style="text-align: center;">発展途上国への対応</p> <p>2011年8月24-26日、インド、ゴアでアジア極地科学フォーラム(AFoPS)が開催された。北極に領土を持っていないアジア諸国の連携であり、日本、韓国、中国、マレーシア、インドが加盟し、タイ、フィリピン、ベトナム、インドネシアがオブザーバーである。</p>

関連学術分野の動向と今後の重要課題(120文字以内で記載)

<p>北極計画の長期的指針を議論する第Ⅲ期国際北極研究計画コンファレンス(ICARP-III)がIASC創立25周年に当たる2015年に開催される(詳細未定)。2011年度から国立極地研究所に北極気候変動研究事業が発足、更に、5月24日、幕張で北極環境研究コンソーシアム設立会議が開催された。</p>
--

国内における国際学術団体への対応状況

国際学術団体の役員就任状況(過去10年間・新しいものから遡って5件まで記載)

国際学術団体における 役職名	氏名	任期	
		開始年	終了年
国際北極科学委員会(IASC)大気作業部会副議長	田中博(筑波大学)	2011	2015
国際北極科学委員会(IASC)雪氷作業部会副議長	大畑哲夫(JAMSTEC)	2011	2015

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名 IASC小委員会

学術会議以外の国内対応組織・委員会等

北極環境研究コンソーシアム
国際北極科学シンポジウム実行委員会

国内の関連学協会等の状況(主要なもの5件まで記載)

学協会の名称	会員数	学協会のホームページURL
日本地球惑星科学連合	37000	http://www.jpгу.org/about/societies.html
日本気象学会	4459	http://wwwsoc.nii.ac.jp/msj/
水文・水資源学会	1300	http://www.jshwr.org/modules/news/
日本生態学会	4000	http://www.esj.ne.jp/esj/
日本雪氷学会	1000	http://wwwsoc.nii.ac.jp/jssi/index.html

学術会議の国際対応分科会(小委員会)の活動状況

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名
所属分野別委員会

IASC 国際対応小委員会

分科会(小委員会)の構成

委員長	副委員長	幹事	
杉本敦子			

会員数	連携会員数	特任連携会員数
	2	

分科会(小委員会)の活動方針(箇条書きで120文字以内で記載)

- ・ IASC評議会、IASC作業委員会の方針に沿った活動の推進
- ・ 北極域研究の国際対応の窓口
- ・ 地球惑星科学連合大会のレギュラーセッション開催への提言
- ・ 国際北極研究シンポジウム開催への提言
- ・ 国内外の北極研究の奨励、推進、調整

今期の会議開催状況(開催日時の新しいものから遡って6回まで記載)

会議開催日時 (2009/05/01の形式)	主な審議事項・議題等
第4回IASC小委員会(極地関連小委員合同会議)2011/7/7	国際極年(IPY)を契機に北極と南極の双方を扱う包括的な研究組織の構築の必要性が叫ばれ、IPYレガシーを集積・維持しつつ、関係者からの意見・情報交換。「国際極地10年」の対応。
第3回IASC小委員会2010/8/31	IASC作業部会のメンバーの推薦について、メンバーを決定するに当たり、現在、同時進行している文科省の北極作業部会の動向をみる必要があるが、最終的に5名の委員が決定した。科学研究費の文科、細目等の要望について
第2回IASC小委員会2010/7/30	2010年北極科学サミット週間IASC会議報告、IASC作業部会の設置について、北極研究検討作業部会の設置について、IASC作業委員会候補者について
第1回IASC小委員会2010/3/19	2010年度の国際北極科学委員会(IASC)評議会、北極に関わる国際情勢、北極評議会オブザーバー、第2回国際北極研究シンポジウム(ISAR-2)、北極研究の国内組織について
北極域研究検討委員会2009/11/11	地球惑星科学連合大会2010の開催準備、第2回国際北極研究シンポジウム(ISAR-2)の問題点の整理・スケジュール、科学研究費の応募申請、北極域の科学の将来展望について
北極域研究検討委員会2009/10/21	地球惑星科学連合大会2010の開催準備、第2回国際北極研究シンポジウム(ISAR-2)について、科学研究費の応募申請、北極域の科学の将来展望について

日本における国際学術団体の活動の周知・広報の状況(箇条書きで120文字以内で記述)

2011年度より、北極環境研究プロジェクトがスタートし、北極に関する広報を強化する。従来通り、IASC小委員会は日本の北極研究のディレクトリーを毎年、発行し、更新に努めている。現在、国立極地研究所ホームページの中に公開している。
<http://www-arctic.nipr.ac.jp/J-direct.html>

国際対応における国内学協会との連携状況(箇条書きで120文字以内で記述)

これまで活動の中心であった「北極域研究検討委員会」が2011年度より、北極環境コンソーシアムに発展的解消した。コンソーシアムには約300名の研究者が登録し、北極環境研究に関する情報を提供している。また、地球惑星科学連合大会「北極域の科学」の企画・運営、国際北極研究シンポジウム開催を準備し、地球科学、惑星科学、環境科学の分野に、北極科学の意義を紹介、連携を呼びかけている。

特記事項・国際委員会による指摘事項等への対応状況(箇条書きで120文字以内で記述)

国際委員会で指摘されている学協会の情報公開、透明性をさらに高める必要がある事から、ホームページを準備している。

分科会・小委員会活動の自己評価等(箇条書きで120文字以内で記述)

わが国の北極研究の活動はまだ十分ではないが、2009年7月に、外務省が北極評議会(Arctic Council)オブザーバーを申請したことから、日本国の北極観測体制の強化の動きが出ている。また、2011年度より北極気候変動研究事業(GRENE)、並びに北極環境研究コンソーシアムが発足し、IASC小委員会の役割はますます大きくなってきた。コンソーシアムを中心に、日本の北極観測推進のために貢献できる体制を作る必要がある。